

ドスケベ落語　＼珍々亭円光の令和しこしこドエロ話＼

ヒロイン

ちんちんてい えんこう
珍々亭円光

14〜16歳くらい、新人落語家の少女。新人離れした流暢な語りの技をもつ。
ちよっと生意気。自信家。お調子者。

声は中音、落語家っぽく、砕けた雰囲気をお願いします。

本作の進行について

落語家の珍々亭円光が、舞台上から観客に向けて噺を披露するという体で進行します。

この台本は通常の落語と同じく、円光の語り（地といいます）と、噺の登場人物のセリフで構成されています。

地は円光自身のキャラに沿った演技で、登場人物のセリフは各々に合った演技をお願いします。（円光を含めると一人五役という計算になります）

観客の笑い声は頂いたデータに合わせて演出します。

■トラック1　まん汁怖い

（BGM：開幕）

お初にお目に掛かります。

はなしか
噺家の珍々亭円光と申します。

以後お見知りおきを。

（SE：拍手）

えー、日本語には、頭かしらに処女ってつく言葉が色々あるんでございます。

作家の処女作だとか、船の処女航海だとか、聞いたことがありますかね。

誰も手をつけてねえ林しんじょうりんって意味で、処女林なんて言ったりもします。

要はモノゴトに手をつける前の、まっさらな状態が処女。

膜を破る前の、ウブなありさまのことなんですネ。

かくいうあたくしも処女落語家でございます。

純愛モノの春画^{しゅんが}…エロ漫画なんかじゃあ、

〔演技〕『優しくしてね』のところで急に妹系のアニメ声になってください
「優しくしてね♡」なんて、

〔SE〕扇子を開く音

涙目でこう、くばあと。

〔演技〕素のつぶやきっぽくお願いします

てか扇子ってエロくね？ 実質まんこじゃね？

開くし、膜張ってるし。

〔SE〕拍手

ありがとうございます。

出だしは上々ということで、どうぞ最後までお付き合いくださいませ。

ところで言っちゃあ難^{なん}ですがお客様方、あんまり処女を乗せちゃあいけませんよ。

見習い時代にね、よく師匠に怒られたんですよ。

〔演技〕師匠はツツコミ役のおっさんです。このシーンは師匠と円光とのかけあいですので、
円光のボケに景気よくツツコンであげてください

師匠「お前の枕は長すぎる。そんなんじゃあ、いつまで経っても俺の出番来やしねえじゃねえか」

だって仕方ないじゃありませんか。ちいとも顔と名前を覚えて頂くには、長く居座るほかないでしょう？

あたくし言ってやったんです。

円光「あたくしの枕、そんなに長いですかね。どんくらい長いか、上手い具合に例えてごらんなさいよ」

師匠「そりゃお前アレだよ、アラビアのロレンスだ」

円光「なるほど、アラビアのロレンスですか」。

上手いっ！ さっすが師匠、例えの腕も一人前だ！」

師匠「お、おう。そんなにうまかねえと思うけどよ、褒められて悪い気はしねえな」

円光「まあ、外人のは長いって言いますもんね。三〇センチくらいですかね」

師匠「うん、イチモツの話じゃねえよ？

ロレンスさんのイチモツ三〇センチもねえよ？

そういうタイトルの、四時間近い映画があんだよ」

円光「あたくしにもわかる例えでお願いしますよ。

一九六二年制作デヴィッド・リーン監督の名作戦争映画のことなんか、知りませんって」

師匠「うんお前やっぱ知ってるよね？ 詳しいよね映画。

よしじゃあアレだ。クレオパトラだ。アレも長いぞ」

円光「そんなに長いですかね。クレオパトラの処女膜」

師匠「え処女膜う！？ 膜って定規で計れるかな」。

ああもうやめたやめた。この話はやめ」

円光「へえ師匠。この話ってのは、膜の話ですか？」

師匠「映画の話だよ！ あ、違う！ 枕の話だよ！」

円光「へえすみません師匠。そろそろお客さんの堪忍袋の緒が切れそうなので、まくって参りましょうか。膜の話だけに♡」

師匠「枕の話だよ！」

(SE 拍手)

どうもありがとうございます。こんな感じで、珍々亭円光のドスケベ落語、始めていききたいと思います。

師匠には枕の話をはじめ、あーだこーだと文句をぶたれたもんですけどね、ぶっちゃけあたくしそんなに反省してないんですよ。ええ。

こんなことわざがございます。憎まれっ子、世にはばかる。

素直なばかりのいい子よりゃあ、ちよっと生意気なくらいが成功する秘訣ってえこと
で。

あたくしもうね、そこらのメスガキなんざ目じゃないくらい生意気なんでございますよ。
こんな具合にね。

〔演技〕思いつきりメスガキになってください

雑魚♡ 雑魚♡ 雑魚♡

雑魚師匠の雑魚ちゃんぽ、つよつよ弟子まんこの中でイっちゃえ♡

〔SE〕どよめき

〔SE〕拍手

おっと、ここいらで野次が聞こえてきましたね。

なになに……

師匠とやってんじゃねえか。処女落語家ってのは嘘だったのかよ。援交娘が！

……ふむ。

〔演技〕にやにやした感じで

あたくし、珍々亭円光ですからねえ。

まだ聞こえますよ。何？

ヤリマン詐欺師じゃねえか。メスガキわからせてやる。孕めオラ…

ちよつと〜誹謗中傷はお断りですよ。さすがのあたくしも怒りますからね。

〔演技〕急にガラが悪くなります

おいそこのテメエ、今貧乳つつったか？

テメエだよテメエ。立ちな。

誰の胸がナイアガラガラの滝だオラ！

〔演技〕野次の主が世話になってる支配人だとわかり、驚く

って、支配人！？

〔演技〕急にへこへこします

いやいやこれは失礼しました。

いやあ、師匠ともども、毎度お世話になっております、ええ。ええ。

でもひどいじゃないですか、おっぱい小さいの気にしてるんですよ？
何？ 小さい方が好き？ 小さければ小さいほどがいい？

…ほうほう、続けてごらんさい。

なに？ お前のそのミジンコみてえな乳が大好きだ？

〔演技 急にガラ悪く〕

ってバカ。誰の胸が3ミリメートルだオラ！

〔演技 急に甘えます〕

もお、支配人ったらいけず♡ あとで楽屋に来るように♡
これがほんとの、枕営業♡

〔SE 拍手〕

さて、膜だか枕だかわからんような話をしてるうちに、暖まって参りましたね。
喉がかわいていけねえや。

ここらでお茶でも飲みてえな…つと。

〔演技 お茶をすする〕

ずずず……ふう。

〔SE じよめき〕

〔SE 拍手〕

喉が潤ったら、お茶請けが欲しくなって参りましたよ。
どらやき、せんべい、悪くない。

ぜんざい、大福、好きですとも。

でもお茶と来たら日本人はこれ、まんじゅうでしょう。

おやこんなところにまんじゅうが。ありがたやありがたや。

はむ……もぐもぐもぐ。うめえ。

〔演技 お茶をすする〕

ずずず…

(演技 まんじゅうをほおばる)
はむ……もぐもぐもぐ。

(演技 お茶をすする)
ずずず……ぷはっ。

(演技 まんじゅうをほおばる。これみよがしに美味そうに)
はあむ……んぐんぐ。

(演技 口の中にまんじゅうが入ったまま喋ります)
あのね、むぐむぐ……さっきからね、袖の方から師匠がね、すっげー顔で睨んでくんの。

(演技 お茶をすする)
ずずず……

だいじょぶだいじょぶ、怖くない怖くない。
師匠はアレです、ツンデレでございますから。
ああ見えてかわいいんですよ。
普段は、干からびたまんじゅうみてーな顔してますけどね。
今日の公演が終わったら、きつとこう言ってくれます。

師匠「つたく。てめえの枕は相変わらず長えな。
だがまあ……悪くなかったぜ。
か、勘違いするなよ、別におめえが好きってわけじゃねえんぞ！」

あ、勘違いしないでください。
あたくしは師匠のこと、ぜんぜん好きじゃありませんから。
だいじょぶだいじょぶ、怖くない怖くない。

(SE 拍手)

渡る世間に鬼はなし、なんて言い出したのは誰でございましたかね。
世には恐ろしい連中ばかりじゃねえ、慈悲深い連中もいるとの意味でございますが、

さて、真偽のほどは人によるとしか。
あたくしですか？

渡る世間に鬼はなし、まさしくその通りかと存じます。
だってそうでしょ？

師匠はツンデレだし、支配人は出番くれるし：

それにね、ここにいる皆々様、とっても優しいんですから！

ええ、ですからあたくしが怖いのは、皆さまの仏頂面だけでございます。
しかし人ってのは、好きも嫌いも千差万別だもんで、

鬼が怖いだの蛇が怖いだの、かってほうぼう勝手方々に抜かすもんですから、

女たちの井戸端会議は、いどばたかいぎ時たまこういうセリフから始まるんですよ。

〔演技〕ここからメイソンの噺『まん汁怖い』が始まります。登場人物、トキは夫の愚痴をこぼす若い妻です。がさつな江戸っ娘風にお願いします〕

トキ「ちょっと聞いとくれよ？ あたし最近、旦那のアレが怖くってねえ」

ってな具合にね。

旦那の次にアレと来たら、下世話な話は避けられますまい？

どれどれ、ちょいと聞き耳、立ててみましょうかねえ。

舞台は長屋の洗い場、愚痴に花咲かす女がふたり：

トキ「ねえ花さん、ちょっと聞いとくれよ？ あたし最近、旦那のアレが怖くってねえ」

〔演技〕『まん汁怖い』の登場人物、花は近所の女たちの相談役です。ちょっと大人びた低い声でお願いします〕

花「どうしたんだいトキさん。

鬼嫁で知れたあんたが、何を怖いっていうんだい。

アレってえとアレかい？

旦那のアレが金棒みてーになっちまって、毎晩鬼みてえに腰を打ってくるんだよって話かい？」

トキ「違うよ、逆だよ逆。全然勃たないんだよ。

おかげで夜はひとりきり、金棒のお世話になりっぱなしってわけ」

（演技 引き気味）

花「金棒なんて挿れてんのかい？　すごいねあんた」

トキ「棘々がいい具合なんだよ。

しかし旦那ときたら、まな板の鯉だって元気に跳ねるつてのに、据え膳前すえぜんにしてピクリとも動きやしないのよ。

足開いても乳放り出しても、なき 屈みてえに静かなもんでさ」

花「ムードもへったくれもありやしないね。足開くつてあんた蟹じゃねえんだから。んな大雑把じゃあ、勃つもんも勃たないよ」

トキ「じゃあどうしろつてのさ。このままじゃ自慢のGカップが浮かばれねえや」

花「ちつつち。トキさん、デカいだけの乳はもう古いのさ。
時代はチラリズムだよ」

（演技 疑うように、大げさに）

トキ「チラリズム？」

花「文字通り、女の柔肌やわはだをちらりとだけ見せるつて小技でさあ。

えりあし
襟足からうなじがちらり。

かがんだ拍子に谷間がちらり。

すそ
着物の裾からくるぶしがちらり。

全部丸出しよりか、よっぽどそられるつて聞くね」

トキ「なんだい、まだるっこしいね。

結局、男は乳と穴が好きなんじゃないのかい」

花「トキさんは身も蓋もないねえ。

乳も穴も、見せる必要すらないんだよ」

トキ「そりやどういふこったい花さん。

穴があつたら挿れたい、つてのが男の性じゃないのかい」

花「考えてもみなよ。

野郎どもはガキの頃からスケベではあつたが、いつでも挿入できたわけじゃなかった。相手がいねえからな。かといって性欲はありあまつてゐる。

できることつて言やあ升^{ます}かき、オナニーしかねえ。

穴にぶち込むのを夢に見ながら、道行く女の、ちらりと見える谷間やうなじを、食い入るように焼き付ける。それが若人^{わこうど}つてもんだ」

トキ「まさか、旦那に升をかかせろつてのかい？

バカ言つちやいけねえ！

花さん、あたしゃセックスがしたいんだよ。

出会つたばかりるときみてえな、ドスケベセックスがしたいんだよ！」

花「最後まで聞きなさいよ。慣れつてのは恐ろしいもんでね、

どんなに豪勢なごちそうだろうと、三日も食えば飽きちまう。

トキさん、あんたら何年目だい」

トキ「ことしで三年になるね。…あたしゃ飽きられちまったのかい？」

花「いずれはそうなる。三年ならもつた方だよ。

ヨリさんとはひと月もたなかつた。

だが野郎をもっぺんその気にさせる方法があるんだよ。

つまりね、野郎を若人にするんだ。

原点回帰、童心に帰らせるのさ」

トキ「なるほど…だからオナニーなのかい…」

（演技力説します）

花「ちらりと見えるうなじ、谷間！

旦那はいちいち意識しちまう。昔はあれで夜ごとしごいてたなあ…ちらっとだけつてのがまたロマンなんだよなあ…たまには升でもかいてみるか…

一人の夜を続けた旦那は、じきに一人じゃ満足できなくなる。

白いうなじの襟足を下げて、女の背中を拝みたい。谷間が覗く前を開いて、小山をまるごと拝みたい。夜ごと鍛えたイチモツを、あんなの中に収めたい……！

出会ったばかりん時みてえに、ドスケベセックスができるって寸法だ」

トキ「すげえや花さん！

一周回ってドスケベセックスに帰ってきちゃった！

まるで戦国の軍師みてえだ」

花「エロ孔明と呼びな。策が決まったら即ち行動。すなわち

帰って旦那にかましてきな」

トキ「うん！ こんな感じでいいかい？」

(SE 扇子を開く音)

花「だから乳を放り出すなちゅーに」

時は流れて、三日が経ちました。

所変わらず井戸端会議。

トキと花がいつものように、駄弁を交わしておりますところに、もっぺん耳を傾けましょう。

トキ「いやあ、さっすが花さんだ。

旦那ったらもうすっかり虜になっちゃってね。上手くいったよ。

始めのうちは加減がわかんなくてさ、

乳首がポロッポロこぼれちゃったがね」

花「あんたの乳首は玉子ボーロかい？

ま、上手くいったんなら結構なことさ」

トキ「おうとも。おかげで毎夜腰まいよが止まなくなっってさあ」

花「ふむ。いくら楽しいからって、毎日おんなじことの繰り返しじゃあ、こないだの二の舞

だよ」

トキ「心配いらないよ。ちっとずつ変化つけんのが、スケベを楽しむ秘訣なんだよ。昨日なんかは、金棒でえらく盛り上がっちゃってさあ」

(演技引き気味に)

花「あんた金棒好きだねえ」

トキ「あたしより旦那が好きなんだよ。

ぶっという方から尻にぶち込んでやるのよ」

花「あんた本物の鬼じゃないのかい？」

トキ「いやそれがエラく喜んでるのよ！ 棘々がいい具合なんだってさ」

(演技引き気味に)

花「そりゃ……名器だねえ」

トキ「普段は大黒柱だつてふんぞり返ってるくせにさあ、

床の上じゃあ、女みたいにびーびー泣くのよ。

痛いよ痛いよ、もうよしてくれ！ ってさあ、布団濡らして情けないのなんの！
アーハッハッハッハッハ、たまないねえ！」

(演技引き気味に。観客だけに向けて喋るように)

花「本物の鬼がいるよ」。

鬼に金棒なんて言い出したのあどこのどいつだよ、
絶対持たしちゃいけないやつだよ」

トキ「鬼に金棒といやあ花さんこそ。

ああ気を悪くしないでくれ。

あんた美人なうえに知恵もあるからさ、世渡りも怖いもんなしじゃないのかい」

花「おやおや買い被りだよ。渡る世間は鬼ばかり。

顔がよくたって知恵が回ったって、どうにもならねえことはあるもんさ。

あたしや顔色伺いの毎日だよ」

トキ「へえこりや意外だね。あの花さんにも怖いもんがあるときた。何が怖いか当ててみせようか」

花「問答かい。受けて立つよ」

トキ「ヒントをおくれ。最初の文字はなんだい」

花「いきなりかい。最初の文字は“あ”だよ」

トキ「はい！ アナル！」

花「早いねえ。違うよ」

トキ「はい！ アヌス！」

花「おんなじじゃないか。違う違う」

トキ「うーん…青い尻…？」

花「いったん尻から離れないかい？

もう答え言っちゃおうか。“兄貴”だよ」

トキ「驚いたね。花さん、兄貴がいたのかい」

花「知らなくて当然さね。働かなけりや散歩もしない。

部屋から一步も出やしないんだ。

もう二十九になるってのに、無駄飯食らいのヒキニートでね」

トキ「困った兄貴だね。で、そのクソ兄貴がどしたい。

夜な夜な枕元ん立って、尻穴見せつけてくるのかい」

花「だから尻から離れろっつーんだよ。あんたの口は肛門にあんのかい？

…言うなれば、兄貴の怖いもん知らずなところが怖いね。

あんたの言うとおりクソ兄貴だからさ、家族だけじゃなくて、世間サマの風当たりも強いわけよ。陰口や落書きは当たり前、石投げ込まれんのも慣れちまった。

とうとう業を煮やした親父が、兄貴をぶん殴って説教したわけさ。

しかし兄貴の奴あちつとも懲りやがらねえ。今も絶賛引きこもり中だ。

何考えてんだか見当もつかねえ。

いっぺんウチから叩き出してやろうかと思ってんだ」

トキ「おやまあ豪胆なんだか何なんだか。

周りの目も効かねえ、親父の鉄拳も効かねえとくりやあ、相当の怖いもん知らずだねえ。

逆に考えりゃ、一個でも兄貴の怖いもん見つけりゃ、叩き出すチャンスになるかもしれないよ。

花さん、兄貴に怖いもん聞いてみなよ。用意できるもんならあたしが協力するからさ」

花「えー、しばらく口も聞いてないからねえ。答えてくれるもんかどうか…」

トキ「任しといてよ！ なめくじやゴキブリだったら、いくらでも持って来てやるよ！」

花「**演技**引き気味に」

どんな家に暮らしてんだい？

ま、モノは試しというじゃないか、やってみようかね」

さて、今度は花の兄貴を見てみましょう。

昼間っからカーテン締め切っちゃって、陰気なことこの上ない六畳間でございます。

ここに主のむさい男が、ウンウンうなっているところでございます。
あるじ

（**演技** 花の兄貴はアクの強いニート侍です。芝居がかった太めの声でお願いします）

兄貴「うーん。うーん、困った困った。

男一貫二十九年、拙者がありとあらゆる一人エッチを試してたでござる。
おとしいっかん

（**演技** 調子をつけて、テンポよく）

角オナ床オナオナホール、左手手コキにセルフフェラ。立てば放尿座れば座薬、ネットの海では絶倫侍…。

されど満たされぬ、満ち足りぬ。

一人エッチの第一人者として、トッププロガーとなった拙者でござるが…

一人エッチにはもううんざり！

一日に十回！ そりゃ飽きるでござるよ！

ゴミ箱もティッシュで溢れかえってござる！

童貞も貫けば、魔法使いになれると人は申すが、

このままでは心のチェリーも干からびるというもの。

はあ、誰ぞ、誰ぞこの乾きを癒やしてはくだらんか…」

(SE:扇子で床を叩く…ノックの音)

花「兄貴、兄貴ー。ちょいといいかい」

兄貴「む、花か。拙者いま忙しいでござる」

花「(演技:観客にだけ聞こえるように、ぼそっと)

何が忙しいもんかいヒキニートが。

(演技:兄貴へ呼びかけます)

ちょいと、話があんだけどさ」

兄貴「働きたくないでござる！」

花「まだ何も言っちゃいないよ。

兄妹水入らずなんだ、働けなんて今さら野暮言わないからさ、
きょうだい

ちょいとドア開けとくれよ」

兄貴「そうやって拙者を油断させようとしてえー。めっ！ でござるよ！

そこに父上が控えておろう！ 拙者が鍵を開けた瞬間殴り込む算段であろう！

かーっかつかつつか！ 妹の目論見、破れたりー！」

花「(演技:観客にだけ聞こえるように、ぼそっと)

ぶん殴りてえー。

(演技 咳払いをしてください。咳払いの後は兄貴へ呼びかけるセリフです)
ンンッ

父上なんていやしないよ。話ってのは、そうさね。
たまには兄貴の好きなもんでも、差し入れようと思ってね。
何か欲しいもんはあるかい？」

兄貴「むむ、怪しいでござるな。妹よ、何をたくらんでいる」

(演技 不満そうに)

花「別に、何もたくらんじゃないよ」

兄貴「嘘でござる！ 父上と結託して拙者を嵌める算段にござろう！
拙者は侍！ 暴力にも誹謗中傷にも、絶対に屈しないでござる！
何も怖れるものはないでござる！」

(演技 嘘泣きです。オーバーにお願いします)

花「兄さん…どうして…うううっ…」

(演技 花の演技を信じ込んで動揺しています)

兄貴「ど、どうしたでござるか。泣いている、で、ござるか」

花「どうして信じてくれないんだい。血の繋がった兄妹だろう。
嘘なんてつく必要ないじゃないか

…ただ、兄貴と、仲良くやりたいだけなんだよ…」

兄貴「う…嘘でござろう…」

花、お前、いつも拙者をゴミでも見るような目で…」

花「兄貴の方こそ、嘘つきだよ」

兄貴「なん…だと…」

花「ねえ兄貴。怖いもんなんなんて嘘っぱちだ。

ほんとは、外の世界が怖くて仕方ないんだろう。

なんもかんも怖くって、だけど怖がっていると格好がつかねえから、

なんにも怖くねえってフリで閉じこもってるんだ」

(演技 待キャラが剥がれかけて、素が現れています)

兄貴「そりゃ…おめ…そんなこと…」

ちったあ、あるかもしれないけどよお…」

花「ごめんよ兄貴、何年もほっぽらかしちまってさ。

あたしも怖かったんだよ。

この部屋のドア、無理やりあけちまったら、
取り返しのつかねえ事んなる気がしてさ」

兄貴「花…おめえって奴あ…」

花「教えとくれ。いったい何がそんなに怖いんだい。

正直に答えてくれよ。怖がったっていいんだ。

あたしがぜんぶ、蹴散らしてやるからさ。

大丈夫。兄貴はあたしが守るよ」

兄貴「(演技 『すん』は鼻をすする音)

すん…できた妹を持ったぜこんちくしょう」。

(演技…ここから花に聞こえないように独り言っぽく)

いや待つでござる。これは陰謀にござる。

妹の奴め、拙者から怖いものを聞き出して、いったいどうするつもりでござろうか。

もしナメクジが怖いとでも申したらどうなる？

すやすやと眠る拙者の上に、天井裏からナメクジの雨が降ってくる、など。

…うむ、ありうる。

危うい危うい。騙されるところでござった。

しかし話の流れ、何某^{なにがし}か怖いものを言わねばなるまい…うーむ」

花「昔の話だけどね兄貴。

雨の日にああ、ナメクジが怖いって、びーびー泣いてたじゃないか。

まだ怖いんじゃないかい？

雨の日あ、あたしがついて歩いてやるからさ、心配いらないよ」

兄貴「ナメクジは大好きでござる。

拙者ナメクジで毎日致^{いた}して候^{そうろう}」

（演技引き気味に）

花「そ…そりや奇特^{きどく}だねえ。じゃ、じゃあゴキ…」

（演技食い気味に）

兄貴「ゴキブリも大好きでござる。

拙者ゴキブリで毎日致して候」

花「（演技ドン引き）

ええ…？

じゃあ父上の鉄拳は？ 近所の悪口はどうだい？」

兄貴「大好きでござる。

拙者、父上の鉄拳と近所の悪口で、毎日致して候！」

花「嘘つけよバカ兄貴！ そんな奴どこにいんだい！」

兄貴「しかあし！ そんな拙者にも、一つだけ怖いものがある」

（演技ちよつと嬉しそうに）

花「ほ…。それってのはなんだい」

（演技『まん汁』のイントネーションは『今週』と同じです）

兄貴「まん汁^{じゅう}でござる」

（演技最初の『まんじゅう』は『今週』と同じ、次の『まんじゅう』は『饅頭』と同じイントネーションで）

花「まんじゅう…？ まんじゅうかい？ あのすべすべの」

兄貴「いや、ぬるぬるでござる」

花「ぬるぬる！？ あんこが入ってるやつじゃないのかい」

兄貴「まんこの中から出てくるやつでござる」

(演技)『まんじゅう』は『今週』のイントネーションで。引き気味をお願いします
花「まさか兄貴、まんじゅうってのはその、アレかい。愛液のことかい」

兄貴「左様。まんじる、とも読める、まん汁でござる。

拙者、女性の膣内より分泌される、得体の知れぬ液体が怖くて仕方ないでござる」

花「ま、まん汁が怖いって…どうしてまた」

兄貴「あれは齡六つの折り、師走の夜でござった。

拙者は父上の命により、年越しそばを買うべく、

寒空の街道を、飛脚よろしく走っていた」

(演技)ちよっとめんどくさそうに)

花「おいおい、なんか始まったよ…」

兄貴「道の途中で、独りうずくまる女を見かけた。

ケガか病か、産気づいたか…いずれにせよ放ってはおけん。

拙者は足を止め、何ごとか尋ねた。

すると女は、おもむろに立ち上がった。

長い髪だった。顔は紅潮していた。女は羽織っていた大きな衣をはだけた。

女の裸は拙者の目を焼いた。すべらかで、夜空の白雪も鮮烈だった。

だが真に恐ろしかったのは、股ぐらであった。

女はそこを指さして言った。

『わたし、きれい？』

股ぐらには裂け目があった。

深く、赤く、ぬらぬらとした液体が滝のように零れていた。

それが、まん汁という液体であることを知ったのは、また後のことにござるが、その時以来、拙者の心には消えない傷が刻まれてしまった」

花「そんなことが…かわいそうに。だからまん汁が怖くなっちまったんだね。

でも、まん汁女なんてどこにもいやしないよ。そりゃ、あの夜だけの災難さね」

兄貴「嘘だっ！

今もどこかでうずくまって、拙者を怖がらせようとしてるに違いないでござる！」

花「**(演技)**優しく、心配するように」

困ったねえ…でも待ってておくれよ。

(演技)戦意に燃える感じで

いつか必ず、部屋から出したげるからさ…」

所変わって、女ふたりの井戸端会議。

トキ「ぶははは！ まん汁が怖いだって？

面白い兄貴だねえ。なあにまん汁くらい今すぐだって用意してやるよ。それぞれ」

(SE)袖をばさばさする音

花「トキさんやめなさい。雀がぜんぶ逃げたってじゃないか。

だいいちね、疑わしいと思わないのかい？

まん汁が怖くて家から出られねえなんて、バカバカしいことこの上ないよ。

あのクソ兄貴、凝った作り話こさえて何考えてんだか。

もしかしたら逆張りさやぐばりなのかもしれないねえ」

トキ「花さん、そりゃどういう意味だい」

花「兄貴の野郎は死ぬほどひねくれてるからよ、

なんであたしが嫌いなもん知ってたのか、感づいてるのかもしれない。

つまり、あたしが兄貴の嫌いなもん使って、兄貴を追い出そうとしてるってことに、氣づいてんだよ。

野郎、大好きなもんを大嫌いっつって、大好きなもんを用意させようとしてんだ。そうは間屋が降ろさねえつうの」

トキ「へえー、裏の読み合いつてわけかい。さすが花さん、あったまいい！」

花「とはいえ、どうやって兄貴の鼻を明かしたもんかねえ」

トキ「難しいこたねえ、まん汁を用意してやろうじゃないさ」

花「へえ。その心は？」

トキ「天井裏から忍び込んでさ、天井開けてさ、すやすや寝てる兄貴の口の中にさ、淹みてえにまん汁流し込んでやんのよ！ 溺れ死ぬくれえにさあ！ んで死にかけた兄貴が言うんだよ、まん汁怖いつてね！」

（演技・ドン引き）

花「あなたの発想が一番怖いよ。屋根裏からまん汁垂らすの？ 怖っ！ 人間じゃないよ、珍獣だよもう」

トキ「悪くないと思っただけどね」

花「待ちなよ。アイデアは悪くないんだ…

うん、もしかしたら、兄貴をぎゃふんと言わせられるかもしれない」

トキ「ほうほう、さっすがエロ孔明だ。その心は？」

花「かくかくしかじかって具合だね」

トキ「なるほど！ そりゃちんまんなんだ！」

すみませんねえ皆様。気になる作戦の内容は、お楽しみにつてことで。時計の針を進めまして、その晩でございます。

所は花の兄貴の部屋、芋虫みてえに布団にくるまって、何が嬉しいんだか、今か今かと待ち構えている様子で…

（演技・そわそわして寝付けない）

兄貴「はああ…はああ…

まだでござるか、まだでござるか。

天井裏からまん汁を垂らしてくれる女はまだでござるか！

もう待ち遠しゅうて待ち遠しゅうて、

オナ禁一時間にして先走り汁が止まらないでござる。

〔演技〕ジングルベルのメロディで〕

ちんちんちん　ちんちんちん　汁が出る〜♪

まん汁　潮吹き　クリトリス〜♪

〔演技〕ウキウキの兄貴。思いっきりキモくしてください〕

む、何やら天井から音がするでござるよ。

はてはエッチなネズミちゃんかな？

拙者も狸寝入りするでござるよ〜

〔演技〕実際にすやすやと言ってください〕

すやすやすや、あそれ、すやすやすや…

〔演技〕やや抑えた声で〕

音が、真上にきたでござるよ。

天井の板が外れたでござる。

ごそごそと、衣擦れの音が…

お、お、お…

き、キターーー！

水が、水が、額にぽたりと落ちてきたでござる！

あ、もうちょっと下でござる…

そう、そこは眉間、そこは鼻…そして口に…

入った！

〔演技〕実際にごくぐくと言ってください〕

ごくぐくごく、あそれ、ごくぐくごく

ふう…これがまん汁でござるか。

思ったよりも粘り気が強く、しょっぱいというか苦いというか…
美味いとはお世辞にも言えぬが、

この酷い味のする液体が女子おなごの穴から漏れ出いでると思えば、
背徳オナニーもはかどるでござるよ…！

〔演技〕実際にごくごく・しこしこと言ってください
ごくごくごく、あそれ、しこしこしこ…

〔演技〕降りかかった大量の液体にむせます
むほっ！ ごほっ、んごっ…
い、一気にキタでござる。
まさか絶頂でござるか！

潮吹きであらせられるか、女子おなごよ！

けしからんなあ、天井裏でまん汁垂らす変態女め！
うひょひょひょ、拙者もすぐにイクでござるからね！

〔演技〕実際にしこしこ言ってください
しこしこしこ、しここのこ！

ぴゅーっと出た…！

ふおお、勢いよすぎて、ンん、口の中に入ったでござる…！
んほー、酷い味でござる！

ん…むむ…？
この味。はて、んん…？

〔演技〕口の中のものを吟味する音をください
くちやくちやくちや

〔演技〕飲み込む音をください
ごくん

同じ、だと？
まん汁と同じ味、だと？

はて…どういうことでござろうか？

拙者のちんちんはまんまんだったのか…？

ん？ 上から物音が、ごそごそと。

おなごよ、斯様^{かよう}にハッスルしては、天井板^{てんじょういた}も可愛いそうでござる。

ギシギシ言ってるし、あ、なんかヤバイ音する。

ちよ、ま、あの、なんか釘っぽい落ちてきたんですけど、

あ、ちよ…大丈夫でござるか！？

（演技 天井裏の何者かが落ちてくる）

うおあー！

…あたた、言わんこっちゃないでござるよ…

女子^{おなご}よ、ケガはないでござるか…

暗くてよく見えないでござるな。

電気をつけて、と。

ぎいや~~~~~！

なぜにおっさんがいるでござるか！

なぜに陰茎を露出して…ひっ！？

尻に、尻になんか刺さってる！

っていうかこのおっさん誰！？

なぜ勃起しているでござるか！？

ちよおい、しゃ、しゃ、射精するな！

そこは拙者の布団にござる！

うお、ちよ、来るなケダモノ！

近寄るなでござる！

ひい~~~~~！

花「おやおや兄貴。慌てて部屋から飛び出して、いったい全体どうしたんだい。

何か怖いもんでも見たのかい」

兄貴「花！ 助けてくれっ！

な、な、なんか知らないおっさんが天井から落ちてきて、それで、それでっ！」

花「変な兄貴だね。おぼつかないこと言うんじゃないよ。

それにしてもイカ臭いねえ。升かいてるうちに、夢でも見たんじゃないのかい」

兄貴「まさか、花、お前全部…なんて怖ろしい妹だ。

(演技 悔しそうに)

……つつくう……、完敗でござる……！」

花「はて、何の話だか見当もつかないね。

兄貴が怖いのは、まん汁だけじゃなかったのかい」

兄貴「すまん、拙者嘘をついた。

ちん汁が一番怖い」

おあとがよろしいようで。

(SE 拍手)